

悪 霊 第九部・私刑の夜

悪
霊
第九部・私刑の夜

【登場人物】

伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……………党員。ハウスキーパー
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国し党中央委員になる
佳代……………貧しい農家の娘。安藤澄の女中
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
韓愛子……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
李麗姬……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
リヒャルト……………ドイツの新聞記者。ソ連のスパイ。
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
朴正烈……………朝鮮人青年
村野栄太郎……………左翼の学者。党中央委員長
畑野達男……………労働者出身の党中央委員
小泉俊吉……………農民出身の党中央委員
清水……………労働者出身の党中央委員
岩本……………大学出身の党中央委員。文芸評論家
赤間……………大学出身の党中央委員
大河原章雄……………子爵の令息。
野島二郎……………男爵の令息。

石川加奈子……………銀座のビアホール女給。リヒャルトの愛人
花江……………華族の令嬢
松子……………華族の令嬢
朴美峰……………朴正烈の妹

【時・場所】

昭和八年（一九三三）七月～十一月。東京。

「しかし、遅いなア」

天井に煙草の煙を吹き上げて、貴代美は言った。

「なにが？」

傍らで、縫い物をしながら猪俣佐和子が問う。

「中央委員会だよ」

貴代美は起きあがって言った。

「そろそろ開かれるはずなんだけどな。連絡が来ないんだ」

九月も終わろうとしている夕暮れ時だった。湯島天神の境内下にある平屋が、貴代美の隠れ家である。暖かな日ざしが振り注ぐ中庭に面した縁側に座って針を動かす佐和子と、畳に寝そべって煙草をふかす貴代美は、休日の若夫婦のようだった。

「そういえば、もう二ヶ月になるのね……」

佐和子は針を持つ手を止め、物憂げにうつむいた。二ヶ月前、佐和子が村野栄太郎の擧丸を誤って踏み潰し、死に至らしめた。貴代美は、佐和子をかくまう一方、中央委員に指示を出して隠蔽工作を行い、今のところ事件は表沙汰^{おもて}になっていない。その際、貴代美は中央委員会を九月半ばまで開かないことを提案し、了承された。

その後、一日に一度の「街頭連絡^す」でも、委員からはなんの連絡もなかった。ただ、財政部長

になった畑野達男からは資金集めについてアドバイスを仰いだり、現状報告が頻繁にもたらされ、着々と成果をあげていることは伺えた。「もうそろそろ、委員会を開いていいんじゃないかな」と貴代美は連絡員を通じて他の委員に提案したが、なんの反応も返ってこないまま、すでに九月下旬である。

「なあ、おさわちゃん」

貴代美は立ち上がり、佐和子の横にあぐらをかいて座った。

「あたい思うんだけどさ、もう党は長くはないね」

「そうなの？」

「ああ」

驚く佐和子に、貴代美は庭を見つめながら言った。

「畑野さんや清水くんはともかく、他の委員たちは役立たずのくせに嫉妬心ばかり強くて、他人の足を引っ張ってばかり。警察の紐付き^{むす}としか思えない事ばかりやる奴もいる。たぶん遠くないうちに、一気に息の根を止められるんじゃないかねえ」

「でも……」

佐和子は不安げに問うた。

「そうだったら……貴代美ちゃんだって危なくなるんじゃないの？」

「あたいは、あいつらみたいなのへまはしないサ」

貴代美は微笑んだ。

「こう見えてもモスクワで特訓受けてるんだ。この家だって、党に手配してもらったものじゃないな

く、自分で準備した。党の誰も、あたいの住んでる場所を知らない。警察が党の名簿を押収しても、ここだけは見つからずにすむわけサ」

だから、おさわちゃんを匿かくまってられるのさ。貴代美はそう言って笑った。佐和子は嬉しそうに頬を赤らめたが、すぐに真顔に戻って問うた。

「でも、党がなくなっちゃったら、私たち、どうなるの？」

「さあねえ……」

佐和子は背筋を伸ばし、胸を張って両手を天に突き上げた。

「日本以外のところに行こうか？」

「日本以外？」

「ああ」

貴代美は頷いた。

「なんかあたいたい、最近この国が鬱陶うつとうしくてさ。器うつわのちっちゃい連中が、些細ささいなことで争ったり意地張ったり、メンツばかり気にしてちつとも前に進めやしない。いっそ、大陸にでも行って大暴れしたいなアって」

「いいわね」

佐和子は、ボタンを繕つくろいおえたブラウスを縁側に置き、針山に針を指して、貴代美の肩にもたれかかった。

「もちろん、私も連れて行ってくれるのよね」

「あたりまえだよ」

「私も、なんだか疲れちゃったわ」

佐和子は遠くを見つめながら言った。

「貴代美ちゃんと二人きりで過ごせて幸せだったけれど、外に出る時はとても気を配らなくちゃならないし、いつまでこういう生活が続くのかと思うと、とっても神経が疲れるの。いえ、もちろん自分が蒔まいた種たねだったことは分かっているけど……」

特高警察のスパイだった三沢みさわに唆そとされてやらかした銀行ギャング事件では、海老沼えびぬま千恵子ちえこを助けることができず、死なせてしまった。二ヶ月前には誤って、党中央委員長を死なせた――。

「私つてだめだなあ。貴代美ちゃんがいないと何もできやしない。何かお役に立ちたくても、警察からも党からも追われている身だもの。かえって貴代美ちゃんの重荷おもいになってるかと思うと、なんだかやるせなくて」

ひとしづく涙がこぼれた頬を、貴代美は優しく舌で拭ぬぐって言った。

「重荷だなんて、これっぽっちも思っちゃいけないよ。あたいだって嬉しいんだ」

おさわちゃんと二人きりで過ごすなんて、三年ぶりだったもの。昭和五年の五月、貴代美が武装メーデーに参加するため党に参加するまで数カ月の間、二人は貴代美のアパートで同棲していたのだった。

「ありがとう」

佐和子が貴代美の首に両手を回してすがりついた時、柱時計が五度鳴った。

「いっけね、連絡連絡の時間だった」

貴代美は残念そうな笑顔で立ち上がった。毎日この時間には、近くまで来ている党の連絡員か

ら報告や情報を受け取るため、出かけねばならない。

「帰ってくるまでに、晩ご飯用意しとくね」

新婚の主婦のように小首を傾げて微笑む佐和子に接吻し、秋用のジャケットを引っかけて貴代美は外に出た。

歩くこと十分、湯島天神に近い聖橋は、帰宅を急ぐ人々でごった返している。人ごみの中のほうが、連絡には都合がいい。

貴代美は、橋の袂の欄干に背をもたせかけ、煙草に火を付け、連絡員が現れるのを待った。

「飯島さん」

傍らに立った男が、弱々しく声をかけてきた。

「今日は清水くんかア」

中央委員自ら連絡とはご苦労様、と相手に笑顔を向けようとした貴代美は、思い詰めた面差しの清水に口を嚙んだ。

「どうしたの？」

そう問うと、清水は俯いて言った。匿ってください。

「え？」

「査問です」

「査問？」

貴代美は眉を顰めた

「清水君がなぜ、査問にかけられるわけ？」

「助けてください……」

清水は、眼の端から涙を零しながら呻くように言った。

「畑野さんが、殺されそうなんです」

そのしばらく後。

すでに日は落ちていた。麻布網代町は寄席、演劇場、映画館、飲食店などが並ぶ繁華街で、二の橋まで足を伸ばせば花街も賑わっている。繁華街からやや奥まった住宅街の一角に、そのアパートはあった。コの字型に立てられた洋館で、裕福な階層の学生が多い。

扉の前に、カンカン帽に眼鏡、背広姿の若者が人待ち顔で立っていた。仕立てたばかりらしい、あまり寸の合っていない背広の袖をつまんだり、不慣れに結ばれたネクタイをいじったりと落ち着きがない。

エンジン音とともに、一台のフォードが走ってきて、若者の前に停まった。

「よう。お待たせ」

運転席の窓から、髪の毛をポマードで固め鼻髭をはやした蝶ネクタイの若者が顔を出した。眼鏡の青年が運転席に乗り込むと、後部座席から華やかな香水の匂いが鼻をつく。派手な洋装やアタセサリーで身を飾った若い女が二人、顔を寄せ合ってくすくす笑っている。

「こちらは、野島三郎くん。野島男爵の三男坊だ」

運転席の男が、眼鏡の若者を女たちに紹介した。はじめまして、どうぞ、よろしく。垢抜けない雰囲気若者を蔑むように笑っていた女たちは、彼の身分が華族であることを耳にするや、愛

想よくなつて挨拶した。

「なあ、大河原くん」

車が走り出すと、助手席で身を固くしていた野島が、呟くように言った。

「やはり、あれはまさかつたんじゃないかな」

「なんのことだ？」

鼻髭の若者、子爵の次男である大河原章雄はハンドルを握りながら問うた。野島は声を潜めた。

「あの、例の娘の件だよ……」

例の娘？ 大河原はしばし記憶をまさぐり、ややあつて、ああ、あの朝鮮女か、と呟いた。野

島は頷いて続けた。

「もし彼女が警察に訴えたりしたら……」

「訴えるわけではない」

大河原は不機嫌そうに、後部座席の女たち眼をやつて言った。

「訴えても、警察が朝鮮女の言い分を聞いて、華族の俺たちを捕まえるはずなんかないだろ。今から楽しく盛り上がりという時に、何をくだらんことを」

「やあねえ、男二人でひそひそ話」

後部座席の令嬢たちが口を尖らせる。

「あたしたちも混ぜてちょうだいよ」

「ほうら、お二方ともお冠だ」

大河原は野島の肩を叩き、女たちに向かって言った。

「失敬失敬。話題を変えよう」

それから大河原は令嬢二人と流行歌やスポーツなど世間話に花を咲かせたが、野島は鬱々として弱々しく相槌をうつばかりであった。やがて車は、人気のない暗い道に入った。

「そういえば……」

令嬢の一人が声をひそめて言った。

「檜崎さまの家に泥棒が入ったでしょう」

「ええ、貴重な宝石を盗まれたとか」

「その泥棒は、密航してきた朝鮮人ですってよ」

「まあ、ほんとうに？」

「最近、下関あたりから、大量に密入国してるらしいのね」

「そうなの？ いやあねえ」

「お金を払うと、内地まで密航の手引きをする悪い人たちがいるんですって。新聞にそう書いてあつたわ」

「そういえばこの頃、街中でも朝鮮人や支那人が目につくわね。わけのわからない言葉で喋ってるし、変な匂いがするし、なんだか雰囲気が悪くなつていやだわ」

「お国で真面目に働けばよろしいのに。わざわざ日本にやってくる泥棒するなんて、物騒な人たちよね」

「でも、花江さまのお兄様は、朝鮮の人たちを助ける運動をなさっているのでしょうか？」
「兄は、古くさいのよ」

花江と呼ばれた令嬢は、顔を擧めて言った。

「いまだきマルクスボーイなんて時代遅れもいいところなのに、ぼくたち華族は恵まれているから貧しい人を救わねばならないんだって、昨夜もお父様と大喧嘩なされたのよ。ねえ松子さま、どうお思いになる？」

「わたくしは、こう思うの」

松子と呼ばれた令嬢は言った。

「わたくしも花江さまも、いずれお嫁にいく身よ。結婚相手は親が決めた男性のなかから選ばなくちゃならない。奥様になってしまえば、こんなふう遊び歩くこともできなくなるわ。だったら今は思い切り楽しむべきよ。他人のことにかまっていられるほど、わたくしたちは幸せなご身分とは申せませんわ」

「賛成だね」

ハンドルを握りながら大河原が口を挟んだ。

「左傾した連中は、いや、いまだきは軍人までが、ぼくらを特権階級のブルジョワのと非難するが、ぼくたちだって望んで華族に生まれたわけじゃあないし、華族なりの義務も責任もある。若い間に羽目を外したって、罰は当たらないさ」

そう言った時、後ろから猛スピードで追ってきたトラックが、すさまじい勢いでフォードを追い抜いていった。乱暴なやつだな。大河原は呟いて舌打ちしたが、すぐに笑顔をつくって歌い出した。

「友よ、いざ飲み明かそうよ。心ゆくまで、誇りある青春の日の楽しいひと夜よ！」

「この世の命は短く、やがて消えてゆく……」

松子と花江も、オペラ『椿姫』の「乾杯の歌」を唱和する。

「ねえ、だから今日もたのしくすごしましようよ」

そのとき、フォードの前面に重い衝撃音が響いた。大河原は急ブレーキを踏み、後部座席の令嬢たちはつんのめり、目の前の座席シートにおでこをぶつけ、悲鳴をあげた。

「しまった！」

大河原は叫んで、車を飛び出した。野鳥も真っ青な顔で続いた。

停車したフォードの前に、白いチマ・チヨゴリ姿の女性が、うつぶせに倒れていた。

「死んじゃったの？」

呆然と立ち尽くす二人の男からやや離れて、車を降りた令嬢二人はおそろおそろ問うた。

「わからん」

大河原は、右手で髪の毛をかきむしりながら言った。

「ぼくのせいじゃない。急に飛び出してきやがったんだ」

「お、大河原くん」

野鳥は震え声で言った。

「すぐに、病院に運ぼう。今ならまだ間に合うかもしれない」

「え。いや、しかし……」

躊躇う大河原の背後で、「だめよ！」「冗談じゃないわ！」と、令嬢二人が叫んだ。

「新聞にかぎつけられるかもしれないじゃないの。絶対にだめよ！」
と松子が言うと、花江も同意した。

「わたくし、明後日お見合いなのよ！ 新聞沙汰になったら、せつかくの縁談が壊れちゃうわ。たかが朝鮮人のために、そんなの真つ平よ」

たかが朝鮮人、との言葉に野島が花江を見つめたとき、松子も言葉を添えた。

「そうよ、そうよ。急に飛び出してきたこの女が悪いんだもの。ほっとけばいいわ！」

そのとき、倒れていたチマ・チヨゴリの女が、顔をあげた。俯せたまま左右の手を、二人の令嬢に向けて突き出した瞬間、乾いた銃声が響いた。同時に、令嬢二人は後ろに吹き飛ばすように仰向けに倒れた。額に穴が開き、血が噴き出した。

「あ……！」

男たちがやっと事態を飲み込んだとき、女の両手は、野島と大河原、それぞれの額に向けられていた。両手には拳銃が一丁ずつ握られている。男たちは両手をあげて凍りついたように動かなくなつた。

「余計なことを言わなければ、巻き添えにする気はなかったのに」

女……李麗姫は男たちに拳銃を擬したまま、ゆつくりと起きあがり、射殺したばかりの令嬢二人の死体を見下ろして呟いた。

「な、なんのまねだ……」

大河原は真つ青な面差しで、呻くように問うた。麗姫は大河原に近寄り、無言で股間に膝を打ち込んだ。大河原は眼を見開き、嘔吐しそうな面差しで、両手で股間を押さえ、うずくまつた。

「ひっ！」

喉の奥で小さく悲鳴をあげた野島を同じ目にあわせ、麗姫は闇の奥に向かって手で合図した。さきほど、フォードを追い抜いていったトラックが戻ってきた。荷台から降りた男たちが、悶絶する男二人と女二人の死体をトラックに積み込み、麗姫を乗せて走り出した。

その頃。

湯島天神下の貴代美の隠れ家の茶の間。両手で己が膝を掴み、俯いて正座する清水を、卓袱台を挟んで貴代美と佐和子が向かい合って座っていた。

「清水くん、少しは落ち着いた？」

貴代美の問いに、清水は頷いた。

「いったい、何があったのかナ。詳しく話してくれる？」

清水は話し始めた。

——前日、清水は連絡員から、中央委員会の開催を聞いた。場所は、いつも開かれる岩本の隠れ家ではなく、甲州街道に面する幡ヶ谷にある一般党员の家だという。一度訊ねたことがあったが、郊外の人けのない原っぱにぼつんと建つ二階家だということは覚えていた。

今日の午後三時、清水は指定された家に向かった。扉に囲まれたその家の二階は、窓のカーテンがすべて閉められていた。妙に静かだな……。そう思って近づこうとした時、門の格子戸が大きな音をたてて開き、一人の男が転がり出てきた。畑野達男だった。続いて、三人の男が飛び出してきて、畑野の上に折り重なるようにのしかかった。

清水はすばやく、近くの木影に身を隠した。二人の男が畑野を押しさえつけ、一人が紐を取り出して縛り始めた。縛っているのは小泉俊吉だった。

すっかり抑えてなくちゃだめじゃないか、そう言いながら現れたのは赤間だった。続いて出てきた岩本は、周囲を見廻してから、無理に立たされた畑野に近づき、いきなり股間を蹴り上げた。畑野は呻いて身を折った。その畑野に岩本は怒鳴った。

「馬鹿にしゃがって……お前が鼻^{ひな}尻^{しつ}にしてる女工^{むすめ}上がりと同じやり方で、絶対に吐かせてやるからな」

男たちが、悶える畑野を押し込むように家に入った後、清水は足音を忍ばせて家を離れ、一気に走った。平党员時代、一度、連絡^{れんらく}に訪れたことのある、貴代美との連絡場所に向かったのだ。た……。

「ふうん、そう……」

貴代美は腕組みをして俯き、呟いた。

「畑野さんの股ぐらを、ねえ……」

「ねえ、清水さん」

猪俣佐和子が問うた。

「畑野さんが査問を受けなければならぬ理由はあるんですか？」

「これは街頭連絡の際、ある連絡員から聞いた噂ですが……」

畑野が財政部長に就任した時、ある男を党员にさせた。もともと街の与太者だった男だが、資金集めに手腕を発揮した。根は生真面目だったので畑野の信頼は篤く、模範党员として知られる

ようになった。だが、彼が入党した頃から逮捕者が増え始めた。岩本や赤間は、彼は警察のスパイではないのかと疑っているというのである。

「なるほどね」

貴代美は頷いた。

「手腕の差を見せつけられ、恥をかかされた腹いせに、そいつだけじゃなく畑野さんにもスパイの嫌疑をかけようってわけか。あいつらがやりそうな事だな」

「貴代美さん、どうしましょうか」

清水は涙を流しながら言った。

「あの様子だと、畑野さん、殺されかねませんよ」

「殺されるだろうねエ」

冷静に言う貴代美を、清水と佐和子は驚いて見つめた。貴代美は続けた。

「モスタワの保安部^{モスタワの保安部}は、拷問する時には必ず女にきんたまを蹴らせるの。なぜだと思う？」

二人が答えられずにいると、貴代美は言った。

「ね、清水くん、小林多喜二さんの葬式に参列した時のこと覚えてる？」

清水は頷き、ご一緒しましたね、と言った。

著名なプロレタリア作家の小林多喜二が逮捕され、特高警察の拷問を受けて死亡したのは、七ヶ月前の二月だった。新聞では、留置場内で突然心臓発作を起こして死んだことになっていたが、遺体が自宅に運ばれた後、体を改めた遺族や同志は愕然となった。全身が蚯蚓^{みみず}腫^{はれ}れに覆われ、特に下半身は内出血でどす黒く変化していた。貴代美は、清水とともにその場に立ち会っていた。

「特高のやつら、あきらかに小林さんのきんたまを蹴り上げてた。一度だけじゃなく幾度もね。それでも小林さんは白状しなかった。だから特高も焦^{あせ}って、死んでしまふまで殴^{なぐ}ったり蹴^けったりを続けたんだって、あたい、すぐ分かったよ」

なぜだ小林さんが死ぬまで白状しなかったか、わかる？ 貴代美は、今度は佐和子を見て言った。しばらく首を傾げて考えていた佐和子は、やがて言った。

「それは、モスクワの保安部に、必ず女性に蹴らせるのと関係があるの？」

貴代美は頷いた。佐和子は、清水を見やって問うた。

「女性に蹴られるほうが、男性にとつては、より屈辱的ですよね？」

清水は何かに気づいたような顔になった。貴代美は言った。

「そう。弱いはずの女に蹴られて、みつともない姿をさらした男は、恥ずかしさのあまり頭がおかしくなり、言うがままの操り人形になっちゃうもんだ」

モスクワでは、政治犯の裁判は公開で行われる。被告は、判で押したようにすべてを白状し、党の許しを請い、喜んで刑に服する。それを映画に撮影して公開することで、人民は党の権威を改めて学ぶのだ。

「日本の特高のように、殴^うったり蹴^けったりして顔に傷が残ったりしたら、拷問で無理矢理白状させられたことがわかっちゃう。あくまでも自分の意思で白状し、党の慈悲にお縄^{すなわ}りする姿を見せることが大事なんだ。そのためにいちばん使える手口^{てくぐち}つのが、女にきんたまを蹴らせることなのサ」

もし、きんたまを蹴るのが男だったら、蹴られたほうは意固地になって白状しなくなる。さら

に手荒に拷問する。やられるほうは、ますます意固地になる。

「日本では、警察がいったん白状させまえば、裁判でいくら被告が自供^{じこ}を翻^{ひるがえ}そうと、裁判所はまず認めない。だからともかく白状させることを優先させる。死んでしまっても非公開にしちまえばいい」

その結果、日本の特高警察は、小林多喜二のように公^{おおやけ}にはなった例はほんの僅^{わずか}かだが、百人近い黨員を拷問で死に追いやってる。

「モスクワの保安部に比べりゃ、日本の特高なんてド素人。まして岩本や赤間みたいなインテリは、喧嘩慣れしてないだけ、凶暴になると手加減をしないもの」

貴代美は溜息をついて言った。

「気の毒だけど、畑野さん、死ぬかもね」

呆然となった清水の肩を、手を伸ばして慰めるように叩いた貴代美は、立ち上がって「行くよ」と佐和子を促した。

「行くってどこへ？」

「もう党は終わりだよ。もし畑野さんが死んでしまつたら、岩本や赤間がうまく細工できるはずがないもの。たとえ畑野さんが死なずにすんでも、中央委員同志で死にそうになるまでリンチをしたことがバレて、警察が大々的に宣伝したら、世間も黨員も党を見放すだろうからネ」

貴代美は部屋の押し入れを開け、奥から金庫を取り出した。鍵を使って金庫を開け、札束を数えて清水に渡した。

「これは？」

訝しげに問う清水に貴代美は言った。
「すまないけどサ、清水くんは私たちとは別々に逃げて」
「逃げる？」

「今、言っただろ。今回の件は絶対に表沙汰になる。今度こそ、警察は一網打尽にしようとするハズだよ。隠れ家には帰らず、このまま、このお金で遠くへ逃げて」

「でも、こんな大金……」
躊躇う清水に、貴代美は声を苛立たせた。

「清水くんには逃げ延びてもらわなきゃ困るんだよ。もし清水くんが警察に捕まって拷問を受けても、この家のことを白状するはずがないって信じられるほど、あたいは君のこと信用しちゃいないんだ！」

清水は俯き、わかりました、と呟いた。貴代美は、目を潤ませる清水を抱きしめ、右頬と左頬をくつつけるロシア式抱擁を饒別に与えた。清水は、「飯島さんも、ご無事で」と言い残して去っていった。

貴代美と佐和子は、荷造りを始めた。

同じ頃。

「どうするんです……」

赤間は、歯の根も合わぬほど震えながら、傍らの岩本に問うた。岩本は壁の一点を瞬きもせず見つめて動かなかった。

八畳間の中央に、畑野達男が仰向けに倒れていた。ランニングシャツに猿股姿、露出した肌は赤く腫れ上がり、足の甲は火傷の跡が生々しい。白眼を剥き、唇の端から泡を吹いている。

「心臓は動いていません」

畑野の傍らに膝を突き、身体を改めていた小泉俊吉が、悲痛な顔をあげて周りの者に告げた。部屋には他に二人の男と、ハウスキーパーの女性が怯えて立っていた。

「死んだんですか！」

ハウスキーパーの女性が悲鳴のように問うた。頷く小泉に、女性は両手で顔を覆って座り込んだ。それを合図に、立っていた男たちは膝が抜けたように畳に腰をおろした。

同じ頃。

朝鮮人部落の朴正烈の小屋のある河原は、白い上衣に赤い袴の朝鮮服姿の女性で埋め尽くされていた。小屋の前には、一メートルほどの高さの台が組まれ、柱が二本立っていた。その柱には、上衣を剥がれシャツとズボンのみ、頭に紙製の三角帽子を被せられ、猿ぐつわを嚙まされ、胸には「強姦魔」と墨書された木の札を掲げた二人の青年——大河原章雄と野島三郎が縛り付けられている。台の側に、二本の松明が掲げられ、怯えきった面差しの二人を照らし出していた。

松明の明かりのなかに、深紅のチマ・チヨゴリ姿の李麗姫に手を引かれた朴美峰が、純白のチマ・チヨゴリを着て現れた。女たちは一斉に「美峰！」「美峰！」と泣くような声を発し始め、二人の青年は、顔を背けた。

「皆さん！」

李麗姫が両手を大きく掲げ、女たちに向かって叫び始めた。大河原や野島には、麗姫の朝鮮語は分からなかったが、美峰と二人を交互に指さしながら喋る李麗姫が、彼らの「罪状」を述べたてて非難し、女たちを煽っているのは明らかだった。

「彼女は、みんなに訊いているの」

いつの間にか、二人の間に愛子が立ち通訳を始めた。

「あなたたちをどうすべきか……命を助けてやるか。それとも命を奪うべきか」

命を奪う、という言葉に二人の青年は一齐に愛子を見て、眼から涙を流しながらさかんに首を振り、懇願を始めた。愛子は薄く笑って言った。

「まずは、あなたの処遇からよ。大河原章雄さん」

大河原は眼を剝いた。李麗姫が美峰を指さしながら話す度に、女たちは大声で叫び、涙を流し、足を踏み鳴らして騒いだ。

「あなたが美峰に何をしたか、説明しているわ。これは日本語に直す必要はないわね。あなたが知っていることばかりだから」

必死で首を振る大河原を尻目に、女たちの興奮は鎮まる気配もなく、ついには「殺せ！」「殺せ！」の大合唱となった。その意味を愛子が伝えると、大河原はますます身を振り、無実を訴えるように頭を幾度も振った。

「凄まじいわね」

伊集院満枝は、妹と、妹を辱めた男たちを凝視する朴正烈に身を寄せ、日本語で囁きかけた。

「これから、あの男たちは、死ぬよりも苦しい目に遭わされるのよ。痛快だわね」

「正烈がそう思うとは限らんだろ」

離れて壁に背をもたせかけ、膝を組んで座っていた金沢文子が言った。

「あなたには単に面白い見せ物かもしれないけど、正烈にとっては、たった一人の血を分けた家族なんだからね、美峰は」

「そうね、気遣いが足りなかったわ」

満枝は素直にそう言い、通訳してくださらなくて助かったわ、ありがとう、と言葉を添えた。

文子は口を尖らせて、立てた膝小僧に顔を埋めた。

河原の喧噪は、朴正烈の小屋のなかにも響いていた。満枝と文子は日本人だという理由で、朴正烈と小沼健吾は男性だという理由で、河原での「祭り」には参加せず、壁に穿たれた窓越しに、小屋のなかから見るようになっていた。

「祭り」の提案者である伊集院満枝は、河原で準備が始まる頃からおおはしゃぎだった。一方の文子は、女たちが河原に集まってくるにつれ次第に無口になった。男たちが朝鮮服姿の群衆の前に引きずり出され、興奮が高まっていくにつれ、頬を紅潮させ息を弾ませて見入る満枝と対照的に、文子は不機嫌にすらなっていっていった。

「気にくわないのか？ 文子と並んで小屋の奥に座る小沼に小声で問われ、文子は耳打ちで答えた。なんか、虫が好かねえ。」

女たちが、ひととき大きな歓声をあげた。満枝は身を乗り出した。女の一人が台に乗り、大河原の股間を膝で蹴り上げた。大河原は仰け反って呻いた。女たちがまた歓声をあげる。蹴り上げ

た女が河原に降りると、別の女が台に乗り、同じように睾丸を膝蹴りにする。数十人の女たちは老いも若きも行列を作って、同胞の少女を辱めた男の急所を責めはじめたのだ。

「始まったわ……」

満枝は、悶絶する大河原を見つめながら、いつしかスカートの中に手を差し込んでいた。

「あれでも潰さないように、手加減しているのよ」

愛子は落ち着いた声で、のたうちまわる友人を凝視して恐怖に震える野島に言った。

「とどめを刺す……つまり完全に潰してしまうのは、美峰の役目だから」

確かに女たちは、全力を込めてではなく、軽く蹴っていた。だが、たとえ軽い衝撃であっても、すでに傷つけられた脆弱な睾丸に与える苦痛は絶大だった。蹴り上げられる度に、大河原は激しく身悶えしていたが、やがて痙攣する気力も失せたらしく、今にもくずおれそうに俯き、うつろな眼を見開いて、嘔吐する寸前のような面差しとなった。

すべての女たちが蹴り終えると、李麗姫は、興奮してまくしたてたり、大河原を指さして笑いざざめく女たちを制止し、美峰に何か問うた。

「あなたを殺すのなら親指を地面に、命だけは助けるなら親指を天に向けるよう言ってるの」

美峰はためらいなく、親指を地面に向けた。大河原は猿ぐつわの下で絶叫し、女たちは歓声をあげた。美峰は台に上った。最後の力を振り絞って全身で許しを請う大河原の前に立ち、その股間に手を伸ばした。ズボンの上からまさぐって陰嚢を掴むと一気に捻った。大河原の股間で、何かが破裂する音が響いた。数十人の女たちに蹴られ内出血を起こして膨張していた睾丸が破裂し、

一気に血が噴き出して陰嚢を突き破ったのだ。白い麻ズボンの股間がみるみる真っ赤に染まり、大河原は狂ったように海老反りになり激しく総身を震わせた。河原の女たちは息を呑んで、断末魔の激痛にのたうちまわる大河原を見つめた。やがて大河原は失神し、微動だにしなくなった。

李麗姫が袂から短刀を引き抜くと、女たちの口から吐息が漏れた。麗姫は眉一つ動かさず、大河原のズボンを切り裂き、破裂した陰嚢と萎縮した陰茎を露出させた。手際よく陰茎を切り落とすと、大河原の猿ぐつわを外して口の中に押し込んだ。

失神していた大河原が意識を取り戻した。眼を見開き、空気を求めるように激しく身を振った。陰嚢の裂け目や陰茎を切断された傷口からおびただしい血が噴き出した。その状態が数分続いた。やっと大河原の身体が動きを止めた時、彼の魂はこの世のものではなかった。

女たちは獣のように咆哮した。

「素晴らしいわ！」

小屋の中では、窓から外を食い入るように見つめながら、伊集院満枝が上下に体を動かし、喘いでいた。彼女の向かいには、朴正烈の恍惚に火照った顔があった。床に座る正烈の陰部と、スカートをはいたままそこに跨った満枝の陰部が繋がっていた。

男を犯すようにしながら河原で展開される惨劇を観覧する満枝を、小沼は呆然と見つめていた。彼女がずっと求めていた光景は……これなのか？

父・伊集院太吉が何者かに去勢された死んだ直後の十歳の満枝に股間を蹴られたのは、十二年前だった。なぜ幼い満枝がそんなことをしたのか、小沼には見当もつかず、成人した満枝に運動

を支援されるようになってからも、問うことが憚られていた。
今、わかった。これこそが満枝の見たかった風景であり、彼女は、この国の各地に同じような光景が繰り広げられることを夢見て、それを実現させようとしているのではないか。

ああ！

満枝が大声で叫び、のけぞった。朴正烈も興奮した面差しで、激しく満枝を突き上げていた。いつの間にか、小沼の身のうちも熱く滾っていた。思わず小沼は、不機嫌に俯いたままの文字を見やった。小沼の視線に気づいて顔をあげた文字は、首を横に振った。

「とてもじゃないが……」

文字は言った。

「そんな気にはなれないや」

「次はあなたの番よ」

李麗姫や美峰、そして河原の女たちのすべての視線が、恐怖におののく野島に注がれていた。

李麗姫が、女たちに何か言い始め、韓愛子が通訳した。

「あなた、ここに連れてこられる時、大河原に命ぜられて仕方なくやったのだと言ったわね」

野島は必死で頷いた。

「あなたの父親が大河原家に多額の借金をしているから、言うことをきかないわけにはいかなかった。本当は、美峰を犯したくはなかった。すまないと思ってる」と

涙をこぼして頷き続ける野島に、愛子は続けた。

「あなたをどうするか美峰自身に決めさせたいと、彼女は提案してる。みんな賛成してくれたみたいね」

口々に何か言い合う河原の女たちを両手で制止し、麗姫は美峰に訊ねた。美峰はしばし野島を見つめ、それから何か麗姫に告げた。麗姫はその内容を大声で女たちに伝えた。賛同する者、反対する者、女たちの反応は様々だった。野島は不安げに愛子を見た。愛子は無言で薄笑いを浮かべていた。

やがて、麗姫が台があがってきた。女たちは口を閉じ、成り行きを見守った。

「あなたの処遇が決まったわ」

愛子が告げた。

「命だけは助けてあげる」

野島は安堵したように天を仰ぎ、それから涙を流して、美峰に向かって幾度も頭を下げ、謝意を表明した。

「安心するのはまだ早いわよ」

愛子が言うと同時に、麗姫は再び短刀を鞘から抜いた。

「罰としてあなたの辜丸を二つ、切り落とします」

猿ぐつわの奥で、野島は絶叫し、絶叫は、女たちの歓声にかき消された。

「まったく冗談じゃねえぜ」

幡ヶ谷の原っぱに建つ二階家の八畳間で、党中央委員の小泉俊吉は、こゝ切れた畑野の遺体を

前に、いまいましてに眩いていた。

「お偉いインテリ様は、死体を埋めるなんて下賤な仕事はできませんってか」

後は任せたと、言い残して岩本と赤間が去った後、小泉は二人の平黨員に指図して、とりあえず庭に穴を掘らせた。埋めておく以外、処置の方法などあるはずがない。

農民出身の小泉は、インテリ幹部に媚びを売ること、中央委員にまで出世した。そんな小泉を、同じ境遇出身の黨員たちは嫉妬まじりに軽蔑していた。いま、庭に穴をほっている二人の黨員もいやいや命令をきいていた。ハウスキーパーの小娘までが、何をむくれているのか、二階にあがって襖ふすまを閉め、自室に籠もっている。

面白くねえ……。

でも、それも今日で終わりだ。今まで俺を見下した連中に鉄槌てつづいをくだしてやる。

小泉はそう眩くと、来ていた背広の内ポケットから、書類の束を掴みだし、た。これだけありや、ずいぶんご褒美ほうびがもらえるはずだ、とまたも眩いた。

「おい」

書類を胸ポケットに収め、小泉は庭に向かって声を掛けた。

「あと、どのくらいかかりそうだ」

「どのくらいって、まだまだ、かかりますよ」

手にしたシャベルを杖に、額の汗を拭いながら、一人の黨員が怒鳴り返した。

「だいたい、どのくらいだ？」

重ねて問う小泉に、二人は顔を見合わせていたが、少なくとも三、四十分はかかります、と返

事した。

「そうか」

小泉は頷き、俺は街頭連絡に出なきゃならん。また戻るから、よろしく頼むな、と言い残して、家を出た。

門をくぐって外に出ると、強い風がごうごうと吹いていた。人の気配がないのを確かめてから、ポケットに手をつっこみ肩をすくめて足早あしはやに歩き出した。追われているかのように、幾度も背後ろを振り向きながら。

もう少しで明るい街の通りに出る寸前、不意に目の前に現れた人の気配に、小泉は棒立ちになった。

どこから現れたのか、秋用のコートにロングスカート、ベレー帽をかぶった女が、小泉の前に立ちふさがったのだ。

「どこに行くのサ？」

背後の街灯りが逆光になって顔は何えなかったが、声の主が誰だかはすぐに分かった。

「飯島か……」

小泉は狼狽うろたえたように周囲を見廻した。貴代美は、冷たく言った。

「相変わらず呼び捨てかよ」

他に誰も言ないのを確かめてから、小泉は薄ら笑いを浮かべた。招かざる客ではあるが、女一人、なんとでもなる。

「さっきまで中央委員会をやっていた。なんで来なかったんだ？」

「しらばっくれんじゃねえよ。最初から連絡なんか寄越さなかつたくせに」
貴代美は声音を荒げた。

「これから、どこに行くつもりだい？ 駅は逆方向、この先は世田谷警察署だぜ？」

小泉の面差しが引きつった。貴代美は得心がいったように頷いた。

「やっぱり、あんたがスパイだったのか……」

奇声をあげて、小泉が殴りかかってきた。さっと身をかわし、着き出された小泉の手首を掴んでねじ上げて背後に回り込み、空いた手で股間を掴んだ。

小泉は激痛に息を呑んだ。睾丸を捻りあげられ、のけぞって呻いた。

「潰されたくなかったら、騒ぐな」

静かに一喝され、小泉は必死で口を閉ざした。

「畑野さんは、どうした？」

貴代美の問いに、小泉の面差しが歪んだ。

「そ、それは……」

「やっぱり、死んだのか」

いたましげに眉を顰め、貴代美は呟いた。

「い、いや、そうじゃなく……」

何か言いかけて小泉は海老ぞりになって絶叫した。貴代美が強く、睾丸に指をのめりこませたのだ。強風が小泉の絶叫をかき消した。

「お前ら、庭でなんか掘ってただろ。何を捨てるつもりだったんだよ？」

見られていたのか……。小泉は観念した。

「あれは……心臓麻痺です」

「なんだって？」

「岩本さんたちが、畑野くんが使っている男はスパイじゃないかと疑って、査問委員会を開いたんです。あたしゃそれに呼ばれただけで……」

「査問と称して拷問に掛けたわけか」

「ち、違います。釈明を聞いている最中に、畑野さん、胸を押さえて苦しみはじめて……たぶん持病の心臓が……」

何か言いかけて、小泉はまたも睾丸を強く圧迫され、泣き叫んだ。

「特高みたいな言いぐさしてンじゃねえよ！」

貴代美は、怒りの面差しで耳元で怒鳴った。

「てめえが警察のスパイだってことは、ハナから分かってたんだ。モスクワ帰りの女工をなめんな、この百姓！」

そう言って、さらに力を込めた。貴代美の掌の中で、睾丸が二つとも破裂した。小泉は、蛙が踏みつぶされたような奇声をあげ、白眼を剥いて全身を硬直させた。貴代美が手を離すと、へなへたと紙のように地面に倒れた。

失神して痙攣する小泉の腹部に蹴りを入れ、仰向けにした。その腹部にまたがり、胸ポケットをまさぐった。書類の束が出てきた。広げると、住所入りの党員名簿だった。

「こいつを手みやげに、警察に駆け込む腹だったのか」

そう呟いて貴代美は、だらしなく口を開いて失神した小泉の顔面に平手打ちを食わせた。小泉が目覚まし、苦しげに臉を開けると、貴代美は眼球に指を突き刺した。

小泉の腹部が大きくのけぞった。はねとばされる前に、貴代美は立ち上がり、飛び退いていた。右手で股間を、左手で血を噴く両眼を押さえ、地面をのたうちまわる小泉を冷やかに見やり、貴代美は踵を返し、駅へと向かった。

数分後。

京王線幡ヶ谷駅の待合室に、猪俣佐和子は身を竦めるようにして座っていた。

佐和子の足下には、旅行鞆が二つ置かれていた。一つは、最善まで一緒にいた貴代美のものであった。湯島の隠れ家から山手線で新宿へ行き、京王線に乗り換え、幡ヶ谷駅で降りた貴代美は、ちよつと待っていて、と佐和子を待合室に残して出て行ったのだった。

電車が入ってきてても身動きしない佐和子に、駅員室の駅員が不審そうな眼差しを向けているように感じられて仕方なかった。待合室に人が入ってくる足音を聞く度に、電気が走ったように震えてしまう。目を向けて警察官でないことを確かめてから一息つくことの連続だった。

「お待ちせ」

そう言って貴代美が入ってきた時、佐和子は安堵のあまり涙をこぼしながら、走って抱きついた。ごめん、待たせたね。宥めるように愛撫され、夢中になって子供のようにながらみついた。

新宿行きの電車が入ってきた。身を寄せ合って席に座り、貴代美の肩に頭を乗せて佐和子は問うた。

「これから、どこへ行くの?」

「麻布永坂町さ」

「麻布?」

「そこに知り合いのドイツ人でリヒャルトという名前の男が住んでる。新聞記者だけど、日本にも支那にも顔が広い。そいつのついでで上海に渡ろうかと思ってるんだ」

「いいわねえ」

佐和子はうつとりと、車窓の外の闇に浮かぶ無数の街灯を見つめた。

「さっき、日本以外のところに行こうかって言ってたのは、ちゃんとあてがあつてのことだったのね。さすが貴代美ちゃんだ」

強く握ってきた佐和子の手を、貴代美は優しく握り替えし、その頬に唇を当てた。

その頃。

麻布網代町と赤坂の中間あたりの道路では、額を打ち抜かれて射殺された令嬢二人の死体が通行人によって発見され、駆けつけた警官や新聞記者、弥次馬の人だかりができていた。

同じ頃。

市谷台下の朝鮮部落の河原では、数十人の女たちの酒盛りが酣だった。アリランの歌声に合わせて踊る女たちをかき分けて、李麗姫と韓愛子は、朴正烈の小屋に入った。

小屋の中にいたのは、陶然とした面差しで身繕いする伊集院満枝と、膝小僧を抱えて不機嫌に

座っている金沢文子、胡座あぐらをかいて煙草を吸う小沼健吾だった。朴は外に出て、美峰とともに、歌い踊る女たちのために七輪に鍋を乗せて煮炊きをしている。

「ちゃんと処理した。終わったよ」

麗姫は、満枝に報告した。満枝は頷き、見事だったわ、と微笑んだ。

「来月にでも、同じ事をやりましょうか」

「同じ事？」

怪訝けげんな顔を見合わせる麗姫と愛子に、満枝は嬉しげに言った。

「ええ、今日のようなお祭りをね。特権階級の子弟で評判の悪い連中を誘拐して……」

「また、やんのか？」

文子が顔をあげ、呆れ声を出した。

「別に誰かが、美峰みたいな目に遭ったわけじゃないのに」

「私たち朝鮮人は……」

愛子が静かに口を挟はさんだ。

「朝鮮人ってだけで、毎日、傷つけられてるわ」

「だからって……」

文子は首を傾げた。

「だいたい、どんな奴をやるんだよ。というか、どうやって選ぶんだよ」

「正直、誰だっていいわ」

楽しげな声音の返答に驚いた文子を手で制しつつ、満枝は続けた。

「最近分かったのだけれど、今、日本でいちばん怯えているのは、特権階級の連中よ。長引く不況で一等国の地位を保てるのか、社会主義者や朝鮮人がいつ暴動を起こすか、青年将校たちが決起するのではないか……。この不安は、特権階級だけでなく、その上にいる人たちにも伝わっている」

「皇族か」

小沼が言った。満枝は頷いて続けた。

「第一次世界大戦が終わった後、ドイツでは皇帝は追放され、ロシア皇帝一家は惨殺された。ほとんどの日本人は、まさか同じ事が日本で起こるはずがないと思ってるけれど、皇族の人たちは当事者だけに、気が気じゃない。皇太后が一時期おかしな宗教を信じていたのは、そういう不安があるからなのよ」

「なるほどな」

小沼は腕組みして言った。

「世の中が騒然となつて、不安が募るほど、あんたは天皇の懐ふとこに近づけるわけだ」

しばし後。

麻布永坂町のソ連大使館の裏手、豪華な洋館がリヒャルトの住み処すまひどころだった。

「上海？」

夜更けの来訪者を、リヒャルトは笑顔で迎え入れた。応接室に案内し、ブランデーを振る舞われた貴代美は、グラスを片手に経緯いきさつを説明し、言った。

「ええ、上海の、あなたの仲間を紹介してほしいの」
流暢なロシア語で長身の白人男性と会話する貴代美を、傍らの佐和子は感嘆の表情で見つめていた。

「もう、党バルティヤは潰滅したも同然。赤間や岩本、主立った党員は根こそぎ検挙され、リンチ事件は新聞記事を飾る事になるわ。幹部たちがよってたかつて同志を殺害したというだけで十分。評判は地に墜ち、再建の希望も木っ端微塵こぼみじんね」

「そうだろうな」
リヒャルトは頷いて言った。

「しかしなぜ上海へ？ 党が潰滅したら、私の協力者になってくれるのではなかったのかね」
「なってあげるわ。ただし、ここじゃなく上海で」

貴代美は、佐和子の肩に手を回して抱き寄せた。

「私の恋人を、女たらしのドイツ人の側そばに置きたくないから」

驚いて見つめる佐和子に貴代美は接吻し、リヒャルトは苦笑して言った。

「わかった。紹介状を書こう。偽造パスポートと旅費も用意する」

「交渉成立ね」

貴代美とリヒャルトは立ち上がって握手をかわした。

その翌早朝。

駒場にある大河原子爵邸の門前で、小間使いの少女が悲鳴をあげていた。門の前に、去勢され、

口に陰茎を押し込まれた大河原章雄の死体が、断末魔の苦悶の表情で横たわっていたからだ。

同じ頃、目白の学習院に近い道ばたで、股間を両手で押さえたまま座り込み、うつろな眼差しで何かを呟きつづける野島三郎が発見された。病院に運ばれて手当を受け一命は取り留めたが、精神に異常を来していた。警察が訊問しても、何も答えることができなかった。

二ヶ月近くたった十一月半ば。

幡ヶ谷の党員宅で中央委員の畑野達男の遺体が発見され、リンチ事件として首謀者の岩本、赤間らの他、八百人の党員が検挙されたという記事とともに、おどろおどろしい見出しが新聞各紙に躍った。

——おそろべき赤色リンチ殺人事件

——私刑暴露 裏切り者惨殺さる

——異分子の一掃 まず血祭りに畑野 岩本、赤間の指揮で

——股をキリでえぐり、硫酸を浴びさす 戦慄の虐殺

「ふうん、小泉もリンチで殺されたことになったんだア」

貴代美は、向かい合って座る佐和子に、読んでいた新聞を見せ、見出しを指さした。「虐殺した二名の死体、床下に埋められる」とあった。その近くに、「女党员、拳銃を構え、同志を縛して脅す」とあり、女性党员の顔写真が大きく掲げられている。

「中央委員より、ハウスキーパーのほう扱いが大きいんだよね」

幡ヶ谷の隠れ家でハウスキーパーをしていた娘の、おとなしそうな面差しを思い出しながら貴代美は笑ったが、佐和子はふさいだ顔になった。あの銀行襲撃事件直後の新聞でも、死んだ海老沼千恵子の写真が、主犯格の手塚や曾根より目立つように掲載されていたことを思い出したのだ。佐和子の気持ちを察して貴代美は笑いをおさめ、腕時計を見やり「そろそろ、行こうか」と立ち上がった。

横浜港に近いホテルのレストラン。毛皮のコートを身につけ、洋行に向かう上流婦人のように着飾った貴代美と佐和子は、旅行鞆を手に席を立った。港には、大型旅客船が停泊している。

「あれで、行くのね」

窓に寄って港を見下ろしながら、佐和子が呟いた。貴代美は笑って佐和子の肩をたたいた。

「ああ、いよいよ新天地だ」

「また、帰ってこれるかしら」

佐和子は物憂げに言った。貴代美が問うた。

「未練でもあるのかい？」

「貴代美ちゃんは？」

「あたいは思い残すことないや」

「そう……」

俯く佐和子の脳裡に、伊集院満枝の婉然たる笑顔が浮かんでいるのを、貴代美は気づくはずもなかった。

(第九部・了)